

真夏のオアシス・ドリーム 【第一章】

陽ノ下光一

「期末の結果は来週出るが、赤点の者は補習だからな」
終礼後、担任の山本の言葉に、ため息を漏らす生徒もいた。せつかくの夏休みに、といった声は、

「お前ら三年なんだぞ。もつと大学のことも視野に入れろ。この時期に赤点を取ること自体、自覚のない証拠だ」という山本の声に鳴りを潜めた。蟬だけが鳴りを潜めるどころか、より大きくなった。

三年か。大学に進むことが至上命題みたいに言われる。俺が、視線を教壇で未だに説教を続ける山本に向けたとき、その視線はこちらに向けられていた。

「遊んでばかりいるなよ。このクラスにも模範的な生徒がいるが、そいつのように自覚を持って取り組め」

山本は、明らかに俺を指して『模範的』と言っていた。それは、他の連中も了解している。

別に教師に媚びてるわけでもない。ただ、流されるように勉強して、クラスの連中のまとめ役をやらされて、周囲の求めることに応じるうちにこうなった。

同輩や後輩は、成績優良で、責任感があって行動力が

あって、その上喧嘩も強い頼れるヤツというレッテルを貼り付けている。

山本が出て行った後の教室は、喧騒に包まれた。テストの感触はどうだったとか、夏はどうするとか。

気分が良くない。俺は頬杖を付いて、窓の外を眺めた。外には海が見える。ただ、徒歩で三十分以上離れているため潮騒は聞こえないが。

「おい、僚。帰ろうぜ」

顔を上げると、友人の京野耕介が鞆を引っ提げて立っていた。

長身に黒い長髪。ルックスも良く、校内での人気は高いが、性格は軽くて勉強は嫌いだから、教師からの評判はすこぶる悪い。

けど、俺の大の友人だ。軽いヤツだが、結構気を使ってくれるタイプでもあるし、他の連中と違って物事にこだわらないので安心できる。

「あ、悪い」

俺が口を開くと、耕介は思い出したらしく、
「三日月園に行く日か」

俺は頷いた。俺は毎週その養護施設に行って、子供たちの相手をしている。その時々で、先生だったり、用務員や友達だったりする。というか、何でもやっている。「よく飽きずにガキの相手してるよな」

耕介は大きく息を吐き出し、俺の左腕を見て、

「やっと治ったけどよ、ガキ助けたせいで腕折ったんだろ？ よく文句の一言も出ねえよな」

半ばあきれて言っている。しかし、病院に運ばれたとき、真つ青になってバイクで駆けつけたのもコイツだ。

そこへもう一人やってきた。高崎旭だ。

俺を含めたこの三人でしょっちゅう固まっているので、周囲は俺たちを三人組と言っている。

この旭は、少々感覚がずれているようにも感じる。

「僚、子供たちのヒーローだもんね」

俺は思わず頭を抱えた。周囲にはまだ多くのクラスメイトが残っている。微笑む旭の隣で、耕介が噴出すのをこらえているのが見えた。

「やめる。恥ずかしい。お前ガキか？ 何がヒーローだ」

旭は首を傾げて、不思議そうに、

「ヒーローはヒーローだよ。僚、すごいやさしいし」

「うっせえ。アホなこと言っただけで帰るぞ。耕介、お前も気味が悪い笑い方してんじやねえ」

机の横にぶら下げていた鞆を取って、教室の出入りに向かうと、後ろから二人が笑って付いて来る。

いつもの放課後。

ただ、今年は決定的に何かが変わっていた。

俺たち三人は、高校で知り合った。三人ともずっと同

じクラスだったが、旭だけは、一年の二学期から来た転校生だった。

俺と耕介は、耕介が俺に話しかけてくるようになったのが縁で、しょっちゅう遊ぶようになった。旭は、耕介が転入初日からちよっかいを出していた。で、その旭は俺の隣の席に座っていたから、いつの間にか三人で一緒にいることが多くなった。

そんな仲だ。

ある意味どこにでもいるような、ごく普通の三人。

「旭ちゃん、榎に寄ってかないか？」

「うーん」

旭は耕介の提案に、俺の顔を覗き込む。

「気にしなくていいぞ」

そう言うと、旭の顔がパツと輝いたように見えた。

なんでそんなに甘いものが食いたいか……。『榎』とは

汐風駅の南口にある喫茶店で、俺たちの行きつけの店だ。

ちなみに『三日月園』は、隣の汐風南駅の近くにある。

俺は、汐風南から通う電車通。他の二人は、耕介がバス通、旭が徒歩通だ。

「僚。そんなに急がないで、駅まで一緒に行こうぜ」

耕介の言葉に腕時計を見る。電車が出る時間が近いな。ゆっくりしすぎたか。

「いや、次の電車に乗らないといけないうでな」

「しようがねえな。じゃ、またな」

「僚、気をつけてね」

俺は二人に背を向け、手を上げて応えた。

旭はいつもみたいに恥ずかしげも無く、手を大きく振っているのだろう。

なんかずれているが、あの笑顔と雰囲気は、自分を思考の深みから引き上げてくれる。

三日月園の子供たちとも通ずるものがあるのかもしれない。子供たちの相手をしている時も、進路やら周囲の期待やら、何も考えないで済む。

子供たちは俺に重荷を掛けてこない。

俺は、制服の群れに混じって改札をくぐりながら、違うなと思った。

旭は重荷を掛けてくるとかこないとか、そんなんじゃない。多分、

「まもなくドアが閉まります。危険ですのぞ」

構内アナウンスに思考を中断して走った。電車通の条件反射。閉まる寸前に列車に入る。

そして後悔した。この時期の列車は汗ばむ乗客のせいで異常に暑苦しい。走っていたから余計だ。

次の駅までの五分間は、まさに地獄だった。

その日の夜、子供たちが寝付いてから家路についた。もう時計は夜の十時を回っている。

海が近いためか、夜は風が吹いて気持ちがいい。汐風駅周辺と違って、この辺りはまだ昔ながらの家がまばらにあるだけで、自然が多く残されているためか、落ち着いた流れを持っている。

街灯の周りに、蛾とかに混じってカブトムシがいた。

昔あれほど夢中で探していたのに、あの気持ちはどこに置いてきたのか。

子供たちと接した後、より深まるわだかまりが、夏の夜のこの清涼感さえも不快にさせる。

ピピピ、と静寂を破る機械音。携帯の液晶は旭からの着信を告げていた。

「どうした？」

「あ、僚。お疲れ様。あのね、明日ヒマかな？」

「別に何もないが」

「じゃあさ、明日遊ばない？ 耕介君と三人で」

「ヤツの補習前祝か？」

「もう、そんなこと言っちゃヒドイよ。……多分そうだけぞ」

「お前もヒドイ事言ってるぞ」

そう言うのと、笑い声が聞こえてきた。

「そうかもね。うー、耕介君には言わないでよ」

「言わねえよ。で、時間と場所は？」

時間と場所を聞いて、二言三言他愛のないことをしゃべってから、

「じゃあ、おやすみ。夜更かしして寝坊したら、めーだからね」

「この年になって、めーはねえだろうが。ガキか俺は？」

「私はあなたの保護者ですから」

「お前に保護されるようなら、人間失格な気がするぞ」

「失礼なこと言わないでよ、もう。じゃ、おやすみ」

「おい、もしもし」

通話はそこで終了していた。アイツ、何気にヒドイ事を言っている。それともまったく自覚していないのか。多分素だろうが、別に言われても腹は立たないから不思議といえば不思議だ。

それよりも、明日が楽しみな自分がいる。

さっきまでの不快な感じは消えていた。

「遅いね。耕介君」

旭のつぶやきに駅前の時計塔を見ると、すでに十一時を回っている。

さっきから携帯につなげようとしても、一向に出ない。

「具合でも悪いのかな？」

「あのバカ。どうせ寝坊だよ」

「僚。あまり人をバカバカ言っていると、実は言ってる人がバカなんだよ」

俺は話す相手を間違えたと思って頭を抱えた。

「あ、来たよ」

バスターミナルに着いたばかりのバスから、遅刻野郎が一人降りてきた。手を振って駆けてくる。

「悪い悪い。いやー実はね、バスに乗る前に妊婦さんを助けたり、おばあさんの荷物持ちをしてたら遅くなった」

ヤツの今時誰が信じるんだといった言い訳に、信じ込まされる人物が一人いた。

「え、そうなの。耕介君ってすごいね。私たち、てつきり具合でも悪くなったんじゃないかって心配してたのよねえ、僚」

こんなヤツは、全世界でも一人しかいない天然級じゃないか。俺はそう思う。思いながらうなずいてやる。

「そうだね。すごいね。はい拍手拍手」

棒読み状態で言ったにも関わらず、旭はすごいすごいと手を叩いた。

耕介は髪を掻き上げながら、それほどでもとか言っている。

俺はこの時点ですでに疲れ果てていた。

「メシ済ませてから遊ぼうぜ。腹減っちゃまって。つか、起きてからなんも食ってないし」

耕介は腹を抱え、全身で訴えていた。旭は手を口元に

当て、

「え、そうなの？ ま、もうそろそろお昼だし、いいよね僚？」

俺はめまいを感じながら、そうだなと答えた。

駅の傍というところもあって、喫茶『榎』へ行くことにした。一緒に話している旭と耕介の後姿を見ながら、俺は何か心の底に引っかかりを感じた。

それが何か思い巡らす前に、いつの間にか隣にいた耕介が、耳元で、

「僚。実はな、ただの寝坊だったんだ」

「うっせえ。誰でもわかる」

「でも、旭ちゃんは信じてるぜ」

「お前が信じ込ませたんだろが」

そう言いつつ、旭の後姿を見て、どうやったら信じるのかと、少々心配になる。アイツ、将来大丈夫か？

で、俺と耕介が後ろでこそこそやっているのが気になったのか、旭が振り向いた。ちようどヤツが俺の裏拳を受け止めたところで、それを微笑みながら見守って(?)いた。

「二人とも本当に仲がいいよね」

俺は、耕介のバカに構わず、旭の肩を叩いて、

「さっさと行くぞ」

と、『榎』へ向かった。後ろでは、旭が俺と耕介を交互に見て慌てているのが、手に取るようにわかる。

「え、え、僚？ ちょっと待ってよ。少しはゆっくり歩いてってば」

旭の慌てる声を聞きながら、俺は足取りが軽くなるのを感じていた。

駅周辺のゲーセンやカラオケ、旭の希望で洋服を見て回ると、すでに時計は六時を回っていて、周囲は暗くなり始めていた。

「じゃ、今日はこの辺でお開きだな」

「おいおい僚。まーだ早いのと違うか？」

耕介が不満そうに言うが、旭は気がついたらしく、手をポンと叩いて、

「あ、今日も三日月園に行く日じゃない」

「そういうことだ」

耕介も仕方ねえなど、髪を掻き上げながら納得した。

俺たちは、旭を家まで送り、また駅へと引き返した。

「また学校でね」

という旭の屈託のない笑顔は、夏の気だるさを吹き飛ばす清涼剤でもある。冬であれば、寒さを吹き飛ばすように置き換わる場所だが。

駅へ向かう途中、耕介が黙りこくっているのが気になった。いつもは、俺に一方的に言葉を掛けてくるヤツなんだが。

駅が見えてきて、じや、また。と声を掛けたとき、ヤツが俺の肩を掴んで引き止めた。

俺は、振り向いた途端、ヤツが思いつめた目で口を開くのを見た。

「僚。俺、旭ちゃんのこと好きだ」

ヤツは、ただその一言だけ。しかし、それで十分だった。俺は、周囲の状況も目に入らなかった。ただ、この空間にヤツと俺だけがいた。

俺は、何かが自分を締め付けるのを感じた。

そのまま、長い時間が過ぎたように感じた。

それは、ものの数分、いや一分にも満たなかっただろうが、あまりに長く感じた。

俺も、耕介も、一言も発することなく、気がついたら別れていて、俺は『三日月園』に向かっていた。

【第二章へ続く】